

まちづくりへの想い

近年、国と地方の財政は不況による歳入の伸び悩みなど厳しい状況となり、私たちの地域も厳しい行財政の環境や地方分権の推進、少子高齢化の進行など、状況は刻々と変化しているのではないかと思います。その中でわれわれ青年会議所は、1998年より地域主権運動を推進するため、広域連携や両市の合併に関する意識調査などを含め、住民を巻き込んだ事業を展開して参りました。

今、地域主権はもっと具体的な政策の段階に入り、住民主権へと形を表そうとしています。道州制特区の可能性と三位一体改革が一層推進され、さまざまな権限がまさに各地方自治体へ降りようとしています。しかし、多種多様な動きや制度疲労により、体力が無くなってきている自治体だけでは、市政を運営していくことは非常に困難な時代になってきました。これからは、そこに住むわれわれ地域住民が、本気になって『住民が主役』となったまちづくりを考えていかななくてはなりません。

今、登別、室蘭両市の住民の間では、行政枠を越えた経済生活圏が形成されている現実をかんがみ、これからの地域経済を担う青年として、広域な視点でのまちづくり

を推進しながら、将来を見据えた西胆振の骨格形成に、新たな発想で提案していきたいと思えます。

昨年度、社団法人登別青年会議所と社団法人室蘭青年会議所とが強固な組織づくりを目指すべく内部変革し、本年度より登別室蘭青年会議所として新たに生まれ変わりました。さまざまな知恵を集合させ、さらには住民が主役となる『住民自治の確立』のため、地域の住民とともに『情報の共有』をはかっていきます。青年会議所だからこそできる運動を再確認し、使命を自覚した元氣な組織として機能的な運動を展開して参ります。

これからは、あらゆる出来事を自分事と捉える事ができ、そこから行動を起こせる意識こそ、21世紀をささえる地域住民としての行き方ではないでしょうか。

(若草町／和泉薫さん・登別室蘭青年会議所副理事長)

国際学術交流研修生と茶道で交流

11月24日、娘から「明日の夕方、お父さんの家の茶室と茶道具を借りて茶道の練習をしたい」との電話がありました。

詳しく聞いてみると「オーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学で日本語を学ぶ学生10人が、



国際学術交流協定を結んでいる室蘭工業大学に、研修で22日から来ているとのこと。その中の1人、ジャスティンさん(19歳・女性)がホームステイしていて、日本語や日本の文化、習慣を勉強したいので」と話してくれました。

翌日の夕方、娘は、ジャスティンさんと孫2人を連れて来ました。簡単なあいさつと紹介を済ませ、茶室へ案内。ジャスティンさんは、嫁の指導で『てまへ(作法)』の基本を、孫たちは、お互い手まねで実技の勉強をしました。練習では、笑い声もでて楽しい交流となりました。

また、ジャスティンさんに生け花の本を見せると「花と器の写真が美しくきれいだ」と言っていました。そして、日本の文化の一部を体験した喜びに感謝して、頭をさげてくれました。交流の良いお手伝いできたと思います。

(栄町／山下玉男さん)

7

月



▲第21回登子連かるた大会 (1月18日)



▲宥のぼりべつ酪農館設立 (1月15日)

2004年を振り返って①